CHAPTER 4
高齢者編

体の衰えから起こる事故

高齢者の事故の多くは、身体能力や運動能力・危険に対する注意力などが低下していることが原因に考えられます。事故を防ぐために、高齢者向けの安全性の高いサービスや、使いやすく工夫された製品を選ぶこと、正しい操作方法を身につけて使うことが大切です。また、子どもの場合と同じように、社会全体で高齢者を守る環境づくりも必要です。

運動機能の低下：筋力が低下してバランス感覚が衰えているため、ちょっとした凸凹で転倒する。濡れた路面で滑りやすくなる。

視覚機能の低下：視力の衰えや白内障などにより、ものが見えにくくなり、目測をあやまり、わずかな段差に気づきにくくなる。

生理機能の低下：温度や湿度の変化に気づきにくく、体調が急変しやすくなる。

心理特性の変化：複数のものに注意を向けることがむずかしくなる。

生活体系の変化：余暇時間が増加し、家の中で過ごす時間が長くなる。

CASE 1

調理中、衣類に着火し大やけど

味噌汁を作ろうとしたら、ガスコンロの火が袖口に燃え移り、大やけどをした。（70歳代 女性）

CASE 2

狭い道、踏み切り、下り坂で事故が多発

ハンドル形電動車いすで踏み切りを走行中、電車にはねられ死亡した。（60歳代 男性）

CASE 3

段差につまずき、転んでけが

シルバーカー（歩行補助車）を使用中、段差のところで転倒し、病院で治療を受けた。（80歳代 女性）

CASE 4

思わぬすき間にはさまれた

介護用ベッドで、使用者の頭部が手すりのすき間にはさまった。（90歳代 男性）

? なぜ起きたの?どうしたらいいの?

→ 原因を知って、リスクを減らそう

CASE 1

衣類への着火 ≫ 繊維の性質によっては、わずかな炎で短時間に衣類の表面を火が走る「表面フラッシュ」という現象が起こることがあります。
火を使う場所では、袖や裾の広がりが少ない衣服を選びましょう。
燃えにくい繊維を使った「防炎製品」の利用は衣服への着火を未然に防ぐ上で効果的です。
総務省消防庁によると、衣類への着火による死者の70％以上が65歳以上の高齢者です。

防炎製品ラベル

もし衣類に火が燃え移ったら → すぐに台所や風呂など身近にある水で消してください。水がない場合は、床や地面に寝転がるとよいとされています。

CASE 2

電動車いす ≫ ハンドル形電動車いすの事故の多くは、狭い道や踏み切り、下り坂などでバランスをくずして転落・転倒することで起こっています。「ハンドル形電動車いす」は、その被害者の7割以上が70歳以上の高齢者で、消費者庁は2010年9月、使用に関する注意喚起を行いました。行政や製造・販売業者が行う運転講習を受けるなどして、安全な操作ができるよう繰り返し練習しましょう。また、福祉用具JISマークに適合した製品を購入しましょう。

CASE 3

シルバーカー ≫ シルバーカー（歩行補助車）は、自立して歩ける人が対象です。平らな場所であっても体重を預けて移動することは危険です。段差や溝、傾斜があるところでは、つまずいたり転んだりしやすいので、特に注意が必要です。事故の90％は、利用者がつまずいたり、バランスをくずして転倒しケガを負ったもの。中には「方向転換が困難」「まっすぐ進まない」など品質に関わる事例もありました。さまざまなタイプのものが出回っていますのでSGマーク認定基準に適合し、使用目的や体に合った製品を選ぶことが大切です。

CASE 4

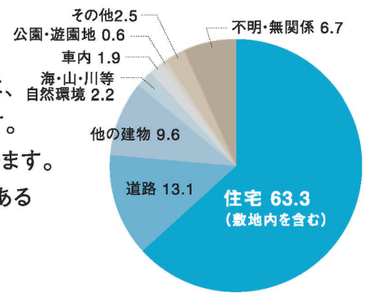
介護ベッド ≫ 介護ベッドの事故の多くは、ベッドと手すり・サイドレールなどのすき間に体の一部がはさまることが原因です。死亡・重傷事故が多く発生しているため、消費者庁は2010年10月、消費者への情報提供と注意喚起を行いました。起き上がりや立ち上がりなどの動作を補助する手すりや、ベッドからの転落を防止するサイドレールの取り付けなどは適切に行われているか、常時確認することが必要です。購入する時は福祉用具JISマークに適合した製品を選びましょう。

ベッドと手すり・サイドレールとの間にすき間がある場合 →
クッションや専用部品を取り付けて改善してください。取扱説明書をよく読んで、必要な対策をとりましょう。

≪ 高齢者の身のまわりには危険がたくさん 衰えを知って対策を ≫

高齢者事故の約3分の2は家の中で起こっていて、最も多い死亡原因はやけどです。
玄関や廊下、浴室内での転倒、階段やベッドからの転落、入浴中のやけどや溺水など、暮らしの中には高齢者にとって危険な場面がたくさんあります。

高齢者事故の発生場所



出典：「病院危害情報から見た高齢者の家庭内事故」（2008年（独）国民生活センター）

高齢者・障がい者にやさしい規格

加齢とともにさまざまな機能が低下する高齢者を事故から守るためには、社会全体でより安全に配慮した環境づくりを進めていくことが必要です。
その一つとして高齢者が使いやすい製品・サービスの開発・普及があります。
日本の提案で、国際規格ISO／IECガイド71＜高齢者および障害のある人々のニーズに対した規格作成配慮指針＞ができ、高齢者・障がい者の方々が使いやすいよう工夫された福祉用具や包装容器の開発などに反映する取り組みが進んでいます。